



TITLE:

ポール・ヴァレリーの『旧詩帖』(Abstract\_要旨)

AUTHOR(S):

鳥山, 定嗣

---

CITATION:

鳥山, 定嗣. ポール・ヴァレリーの『旧詩帖』. 京都大学, 2016, 博士(文学)

ISSUE DATE:

2016-05-23

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k19880>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開

京都大学	博士（文学）	氏名	鳥山 定嗣
論文題目	ポール・ヴァレリーの『旧詩帖』		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>本論文は、19・20世紀フランスの作家ポール・ヴァレリー（1871-1945）の詩集『旧詩帖』（<i>Album de vers anciens</i>）を対象として、所収詩篇全21篇の翻訳と注解を行うとともに、ヴァレリーの代表作『若きパルク』との関連や詩集『魅惑』との比較を通して『旧詩帖』の特異性を明らかにしようとした試みである。</p> <p>詩人としてのヴァレリーの生涯には二つの大きな出来事、すなわち1892年の青年期危機「ジェノヴァの夜」に象徴される詩作放棄と、1912年から1917年にかけて制作された『若きパルク』の刊行による詩作回帰があるが、その詩作時期は大きく3期に分けて考えることができる。まず、12歳で詩を書き始めてから「ジェノヴァの夜」（1892）を経て20代で詩作を断念するまでの初期。次に、およそ20年に及ぶいわゆる「沈黙期」（私的な制作の試みは継続するがほとんど作品を公表しない時期）を挟み、40代にして再び詩作に回帰し、『若きパルク』（1917）、『旧詩帖』（1920）、『魅惑』（1922）を立て続けに発表する円熟した中期。最後に、50代後半から、公的な作品としては韻文詩から散文詩や劇作品に移行する一方、晩年の愛人に宛てた私信には数多くの恋歌（韻文）をしたためる後期である。このように分けると、『旧詩帖』は特異な位置にある。というのも、この詩集に収録された詩篇の大半は、ヴァレリーが20歳ごろ雑誌発表したものに、後年40代に達してから改変の手を加えたうえで公表したものであり、上記の区分でいえば、初期と中期の両方にまたがっているからである。この特異性によって、『旧詩帖』という詩集は主に次の問題点を孕んでいる。</p>			
<p>1. 初期詩篇に対する後年の改変</p> <p>『旧詩帖』に収められた詩篇の多くは初期詩篇の改作であり、詩篇によっては旧作と改作との間にかんがりの異同が見られる。また、一口に旧作と言っても、1890年代に雑誌発表された初出テキストのほかに、1892年ピエール・ルイスとアンドレ・ジッドに贈った自筆自撰詩集（今日ルイスに贈られたものは所在不明となり、ジッドに贈られた『彼の詩』のみが知られる）や1900年代に刊行された同時代の詩のアンソロジー（1900年刊アドルフ・ヴァン・ブベール、ポール・レオトー共編『今日の詩人たち』および1906-07年刊ジェラルド・ワルク編『現代フランス詩人選集』）に収録されたものなど、『旧詩帖』に収められるまでに幾つかの異文が存在する。若書きの作に後年ヴァレリーが施した改変のありようを正確に把握するためには、それらの異文を比較するとともに、フランス国立図書館所蔵の草稿群（『旧詩帖』関連草稿および「旧詩」関連草稿）を参照することによって、各異文・各草稿間の段階的変化を観察する必要がある。また、『旧詩帖』という詩集には版を重ねるにつれて収録詩篇が増補されていったという経緯がある（1920年初版には16篇所収、</p>			

1926年再版で4篇増補、1931年版で1篇増補され、最終的に全21篇となる）が、詩篇のなかには初版以降も改変が続き、1926年の段階で新たに詩節が追加されたものや、1942年の版において大幅な加筆訂正を施されたものもある。つまり、『旧詩帖』の制作年代はヴァレリーの詩作の初期と中期にまたがるだけでなく後期にまで及んでいるのであり、「昔の詩」（vers anciens）を標題に掲げるこの詩集の生成過程は、実はほぼ詩人の一生涯にわたるといっても過言ではない。『旧詩帖』にはさらに、その題名とは裏腹に、『若きパルク』以後に書かれた新しい詩（後年の改作ではなく、まさしく後年の作）も含まれ、「昔の詩」の擬装という問題もある。『旧詩帖』は字義通り「昔の詩」を集めた「アルバム」ではなく、そのようなものと詩人が見せようとした詩集なのである。

なお、『旧詩帖』に関する研究は『若きパルク』や『魅惑』の研究と比べるとかなり少ないが、ピエール＝オリヴィエ・ワルゼル（1953）による先駆的研究に始まり、特にこの詩集を取り上げたものとして、チャールズ・ホワイティング（1960）とスザンヌ・ナッシュ（1983）による研究が挙げられる（前者は『旧詩帖』に収録される以前の旧作を対象とし、後者は『旧詩帖』初版に収められたテキストを対象を限る）。また1970年代、ジェームズ・ローラーやジャン・ベルマン＝ノエルなどが『旧詩帖』所収の幾つかの詩篇について草稿を踏まえた論考を残している。が、『旧詩帖』全体としては、これまで関連草稿が十分に活用されてきたとはいえず、上述した初期詩篇の段階的改変についてもさらなる研究の余地と意義がある。

## 2. 『若きパルク』との関連

『旧詩帖』における後年の改変という問題はまた、『若きパルク』との関連においても考察されなければならない。というのも、『旧詩帖』所収詩篇が推敲された時期は『若きパルク』の制作時期と重なっているからである。フロランス・ド・リュシー（1975）がすでに指摘したように、草稿を参照すると、「昔の詩」と「新しい詩」が当初から截然と区別されていたわけではなく、同時進行する生成過程のなかで今見る形に分かれていったことが分かる。新しい詩は昔の詩に根差し、昔の詩は新しい詩の反映を帯びている。その相互作用を捉えるためには、『旧詩帖』の旧作と改作を区別したうえで、それらを『若きパルク』の決定稿と比較するとともに、両者の草稿をも考慮に入れ、生成過程から最終形態に至るまでの間テキスト性を探る必要がある。

## 3. 先行詩人および同世代の友人の影響

初期詩篇の改変という問題はさらに、先行詩人たちの影響という問題を複雑化する。ここでもまた1890年代の旧作と1920年以降の改作を区別する必要がある、初期詩篇に見られる「影響」だけでなく、それに対して後年ヴァレリーが示した「反応」（ナッシュの言う「過去の変形」あるいは放置）が問題となる。

若年のヴァレリーが感化を受けた詩人としては、ユゴー、ボードレール、ポー、ヴェルレーヌ、マラルメ、ランボーといった名が挙げられるが、その他にも、ジョ

ゼ・マリア・ド・エレディア、アンリ・ド・レニエ、フランシス・ヴィエレ＝グリファンなど、今日あまり注目されない詩人たちの存在も看過しえない。またヴァレリーが20歳前に出会った二人の友人、ピエール・ルイスとアンドレ・ジッドとの交流も注目される。後年『旧詩帖』に収録される初期詩篇の多くは、ルイスが創刊・主宰した『ラ・コンク』誌に掲載されたものであり、また雑誌掲載以前にもヴァレリーはルイスやジッド宛の手紙に初稿を送って批評を仰ぎ、友人による助言によってしばしば詩を書き改めている。上に挙げた先行詩人の作品とともに、同世代の友人による批評や作品も、ヴァレリー初期の詩作に大きな影響を及ぼしている。

### 本論文の構成

以上の点を踏まえつつ、本論文は次のような構成のもと論を進める。

第1章では、『旧詩帖』の各詩篇について、関連草稿を参照しつつ、翻訳および注解を行う。まず『旧詩帖』に収録されるまでのさまざまな異文を確認し、対象とするテキストを選定したうえで、特に上述した問題点、すなわち初期詩篇に対する後年の改変、『若きパルク』との関連、先行作品の影響といった観点から各詩篇を読み解く。

『旧詩帖』所収詩篇全般に通じる改変の特徴としては、次の点が認められる。

まず、初期詩篇に対する後年の改変は、必ずしも『旧詩帖』所収の際に一気になされたのではなく、機会のある度になされた段階的改変であるということ。特に、1900年刊行の『今日の詩人たち』に収録された詩篇については、この段階でかなり改変を施されており、ヴァレリーの詩を初めて収録した同アンソロジーは、20年後の『旧詩帖』における改変を先取りするものと位置づけられる。また、『旧詩帖』所収以降も、特に1926年の再版と1942年の版において、新たな詩節の増補や大幅な改変が見られ、後年の改変は少なくとも4段階（1900年、1920年、1926年、1942年）に分けて捉える必要がある。

内容面（語彙やイマージュ）における改変の特徴として、まず消去された要素に注目すれば、象徴派の詩人たちが多用したために時代色を帯びた語彙や宗教色の濃厚な語彙、あるいは辞書に載っていないような稀語、また頭文字大文字・感嘆符・中断符など、要するに、装飾的要素の消去・削減が見られる。逆に、後から添加された要素としては、静的な描写に対する動的な表現、ポジティブな要素に対するネガティブな要素（明に対する暗、快楽に対する苦痛、優美に対する醜悪など）が注目される。また、後年新たに詩節が増補された詩篇については、異質な要素（別の時制・人称・視点など）を組み込むことによって、全体の構成をより複合的にし、詩節間の対照を際立たせようとする傾向が見て取れる。この複合的な構成という点は、1930年代以降ヴァレリーが手がけた劇作品に通じるものと思われる。

形式面（音韻やリズム）における変化として、音韻の面では、詩句の改変によって豊韻および半諧音などの音韻効果を増す傾向が顕著である。また、ある単語や表現を変える際、通常は、類義語に置き換える（言い換えれば、意味を保ったまま音を変える）が、それとは逆に、類音語を探す（音を保って意味を変える）という、

詩に特有の現象がしばしば観察された。韻律・リズムの面では、1890年代に書かれた詩句には、古典的詩法の要諦ともいえるべき句切りを揺るがせる象徴派風の詩句が散見される一方、後年の改変ではそうした不安定なリズムを古典的な結構に改めるという傾向が全般的に見られる。とはいえ、ヴァレリーは後年、若書きの詩に特有のリズムの揺らぎをすべて消去したわけではなく、わずかながらその痕跡を残しているという点も看過しえない。

第2章では、『旧詩帖』全体を対象として、この詩集が編まれるに至った経緯を概観するとともに詩集の構成について論述する。

まず、『旧詩帖』の経緯（制作背景および生成過程）について、1892年の「ジェノヴァの夜」に象徴される詩作放棄から1910年代の詩作回帰までの時期に焦点を絞り、当時ヴァレリーが友人や妻に宛てて送った手紙や、後年公表した「ある詩篇〔『若きパルク』〕の回想録の断片」などを参照しつつ、一度放棄した詩作に再び手を染めることに躊躇するヴァレリーを出版へと導いた諸要因を探る。また、『旧詩帖』という題名や、当初詩集の序文として構想されていた「ピエール・ルイスへの献辞」について関連草稿を紹介するとともに、この詩集の区別すべき幾つかの版について叙述する。

次に、『旧詩帖』の構成（収録詩篇の選定および配列）について考察する。『旧詩帖』に収録された詩篇が数多くの初期詩篇群の中からどのようにして選ばれたのか、その選定基準を明らかにするために、ヴァレリーが初期詩篇を発表した媒体（雑誌およびアンソロジー）や友人のために自ら編んだささやかな自撰詩集（『彼の詩』および『数人の友達』）を概観する。また、『旧詩帖』初版に収められた16篇の配列および再版以降増補された5篇の挿入個所について考察するとともに、草稿中に見られる「目次」草案を参照し、収録詩篇の選定過程や複数の配列可能性を検討する。さらに、この詩集の最終形態における隣接詩篇の連関性についても吟味する。

第3章では、『旧詩帖』の周辺として、『若きパルク』との関連および『魅惑』との比較という観点から、それまでの考察を発展させる。

『旧詩帖』と『若きパルク』の関連について、本論文第1章（各詩篇の読解）において指摘した点を踏まえつつ、全512行・16断章に及ぶ『若きパルク』のうち、特に「思い出」の主題が展開される第8断章（第190-208行）をめぐって、羞恥に染まった過去に対するパルクの拒否反応に、自らの旧詩と対面したヴァレリー自身の姿を重ね読むという象徴的な読み（レジーヌ・ピエトラや清水徹）の射程を確認する。そのうえで、第7断章終盤（第185-189行）に注目し、「挿話」（1892年『ラ・シランクス』誌初出、1920年『旧詩帖』所収）の一句を引き継ぐこのくだりが、制作時期においても、内容面の象徴性においても、『若きパルク』の再古層のひとつであり、『旧詩帖』に最も近い部分であることを論証する。制作時期を同じくする『旧詩帖』と『若きパルク』の間には、単に決定稿だけでなく草稿段階における

実質的な関連性が見出される。

また、『旧詩帖』と『魅惑』という二つの詩集を、形式および内容の両面において比較することにより、それぞれの特色を探る。『若きパルク』刊行後、相次いで発表された両詩集は単に古い詩集と新しい詩集として対比されるべきではなく、古い層と新しい層を複雑に含む『旧詩帖』が〈多層〉ないし〈不均質〉的であるのに対し、新しい詩のみからなる『魅惑』は〈単層〉ないし〈均質〉的であるというかたちで対照をなす。同じく21篇を収める両詩集はまた、形式面（詩型・韻律・脚韻）および内容面（主題・語彙）においても、それぞれ異なる特徴を示す。『旧詩帖』には主題においても形式（脚韻や文法上の性）においても〈女性〉的な傾向が顕著である一方、『魅惑』にはそうした傾向は見られず、むしろ形式・主題の両面における〈多様性〉が際立つ。収録詩篇の詩型や主題という点では『魅惑』の方がはるかに〈多様〉であるが、各詩篇の制作時期という点では『旧詩帖』の方が〈多層〉的と言える。

要するに、『旧詩帖』という詩集の特異性は〈多層性〉にある。第一に、各詩篇内部に孕まれる制作時期の二重性、つまり1890年代に遡る古い層と1910年代以降の新しい層との混淆によって多層的である。しかも、場合によっては二層にとどまらず、1900年のアンソロジー収録の際に改変された中間層を含むうえ、1920年の初版以降も、1926年の再版、さらには1942年の版において再度手を加えられた詩篇もあり、新旧の層が幾重にも織り込まれている。第二に、収録詩篇相互間の制作時期の懸隔によっても、『旧詩帖』は多層からなる不均質体である。1890年代に発表された旧作のなかでも「ジェノヴァの夜」以前の作とそれ以降の作には弁別の特徴がある一方、この詩集には上述のように1917年の『若きパルク』刊行以後に書き出された新しい詩も含まれる。このように新旧さまざまな層を内包する『旧詩帖』は、まさしくその多層性により、ヴァレリーの初期詩篇群と後期詩篇群をつなぐものと見なすことができる。

最後に、本論文末尾に付録として、『旧詩帖』所収詩篇および公表された初期詩篇に関する情報一覧を付すとともに、『旧詩帖』全21篇の原詩と拙訳を添える。既訳として菱山修三訳（1942）と鈴木信太郎訳（1967）があるが、『若きパルク』と『魅惑』が度重なる訳業、特に中井久夫訳（1995）によって刷新された一方、『旧詩帖』の邦訳は1960年代のものにとどまっているため、本論文で拙訳を試みた。

（論文審査の結果の要旨）

鳥山定嗣氏の論文は、20世紀フランスを代表する詩人ポール・ヴァレリー（1871-1945）が、長い沈黙期間を経て創作活動を再開した後の1920年に出版した詩集『旧詩帖』を研究対象としたものである。沈黙期以前に書かれた初期作品を多く含むこの詩集は初版以降も増補・改変がおこなわれ、最終的に全21篇で構成されるが、鳥山氏はその各篇を正確かつ流麗に翻訳した上で、これに精密な注解を加えるとともに、残された草稿資料や書簡等を参照することにより、初稿から改稿に至る過程を綿密に跡づけた。さらに、詩人の他の作品との細部における比較をおこなうことで、『旧詩帖』が詩人の創作活動の初期から中期に関わるだけでなく、後期の作品にもつながる結節点を形成していることを具体的に示した。

鳥山氏の論文の第一の意義は、しばしば難解と評されるヴァレリーの詩作品について、形式と内容の両面からきわめて精密な読解をおこなった点にある。フランスの伝統的なテクスト解釈法および韻律と詩法の正確な知識に立脚した分析は緻密かつ説得的である。さらに、詩人が依拠したであろう文学的伝統や影響を受けたと考えられる19世紀の詩人の作品も十分に考慮されており、各詩篇について網羅的かつ総合的な解釈が提示されている。また、細部において従来の研究とは異なる解釈を提案している箇所も少なからずある。句読点の変更といった微細な点も含めた異文（ヴァリエーション）の示す微妙な意味の違いを丹念にたどり、改稿のもたらす効果を見定めようとする鳥山氏は、詩人自身の創作についての根本的な考え方—作品は決して「完成」されるものではなく、「放棄」されるにすぎない—を念頭におきつつ、ヴァレリーの詩の「生成」のメカニズムに迫る努力を粘り強くおこなっているといえる。

本論文のさらに重要な意義は、ヴァレリー作品の中でフランスにおいてもこれまで十分に研究されてきたとはいえない『旧詩帖』という詩集にあえて着目し、これを初期詩篇の再出版とする従来の表層的なとらえ方を決定的に退け、初稿・初出稿から改稿・決定稿に至る創作過程とその「多層性」の中に作品の独自性を見出した点にある。詩人ヴァレリーに関する先行研究を十分にふまえた上で、知見の蓄積が少ないテーマを選択し、結果的に新たな展望を提示しえた点に、研究者としてのすぐれたセンスがうかがえる。論者は『旧詩帖』を昔の詩句と新しい詩句が混交した作品としてとらえ、沈黙期を含む4つの時期（1900年、1920年、1926年、1942年）を区別し、それぞれの改変の意味を吟味する。その分析の結果、象徴派の好んだ非古典的詩句が改稿の機会に概して古典的詩句に置き換えられたこと（逆に古典的な詩句が非古典的な詩句に改変された例はないこと）、また詩人の推敲の努力はただ詩句の古層に新層を重ねることではなく、両者をできるだけ均質化する点に向けられたこと、が指摘される。論者はそこに制作年代を意図的に操作する詩人の作為をみるとともに、詩人ヴァレリーにとってより本質的な問題—互いに異質な詩句をどのように有機的に接続するかという「転調」の問題—をみている。

短詩から長詩へ、定型から不定型へという形式の推移が『旧詩帖』所収の詩（例え

ば「ナルシス語る」）の改稿過程にみられる一方、不定型から出発し、最終段階で定型に至る詩（「夕暮れの豪奢」）の例もある。このように詩句の移動、断章の順序の変更など、全体の構成が不断に見直され、模索される点で、ヴァレリーの代表作『若きパルク』（1917）と『旧詩帖』に通底するのがこの「転調」の問題である、と論者は指摘する。『旧詩帖』において分析された古い詩句の改変と新しい詩句の生成のダイナミズムを同時期に進行していた『若きパルク』の制作過程と結びつけて具体的に論じ、二つの作品が同様に旧詩の改変に端を発しながら、そして時には同じ詩句を共有しながら、その後の生成過程で分岐していった、とする鳥山氏の結論には説得力があり、この論文の中心的な主張の一つを成している。同様に、『旧詩帖』とほぼ同時期に出版された詩集『魅惑』（1922）についての考察も興味深い。『若きパルク』出版後、新しい詩篇のみで詩集を編むという計画と軌を一にして、旧詩篇のみをまとめる案が浮上し、前者が『魅惑』へ、後者が『旧詩帖』へと分岐していった、と論者は指摘する。こうして『旧詩帖』はまさに詩人ヴァレリーの初期詩篇群と後期詩篇群をつなぐ作品だと結論されるのである。

厳密かつ柔軟な論旨の展開、的確な引用や論拠の提示、注に記された詳細な補足事項など、全体として完成度の高い論文であるが、いくつかの課題も残されている。初期詩篇のうち『旧詩帖』に収録されなかった作品をも視野に入れること、ヴァレリーの他の作品との詩的想像世界（イマジネール）の連関性をさらに意識して読解をおこなうこと、ヴァレリーにおける詩作と詩論（コレージュ・ド・フランスにおける講義や『カイエ』において展開される「詩学」）を結びつけて論じること、ヴァレリーの詩作を象徴主義および象徴主義に対する反動という19世紀から20世紀にかけての同時代の文学運動との関係に即してとらえること、などは論者の今後の研究課題とすべきところである。しかしこれらの留保は本論文の価値を何ら損なうものではない。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。平成28年4月4日、調査委員4名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。